

政治思想における歴史的予測の問題

——一九世紀ヨーロッパ思想を手掛かりにして——

中 谷 猛

はじめに

現代の思想世界に「終焉主義」(Endism)と名付けてもよい思想傾向が広く見られる。この傾向に目を向けるとき、世紀の転換という歴史事象への思想的対応として捉えることではすまされない、より根本的な諸問題が含まれているように思われる。まず、「終焉主義」思想の立場は近代以降われわれが築き上げてきた科学・技術や産業文明の危機と深く関連する批判的な思想的営為の一環として認識する必要がある。たとえば「ポスト・モダン」学派は近代への「懐疑」または「終焉」といつ視角から西洋的思考の構造的側面に注目し、近代西洋の主観と客観の二分法原理に基づく「理性主義」に根底的な批判を浴びせた⁽¹⁾。近代の合理主義や体系的思考や進歩主義に対する批判的論考が「脱構築」の言説のもとに提示され、われわれの共有する「近代の知」それ自体についての懐疑、あるいはその解体を押し進めているのは確かである。今日論壇での言説にしばしば取り上げられる「終焉主義」はこうした近代文明批判の流れと決して無縁ではない。さしあたり「終焉」という言葉に絞って近年の著作を拾って見ると、F・フクヤ

マが『歴史の終わり』を『ナショナル・インタレスト』誌に発表したのは一九八九年(著作としては一九九二年)であり、ジャン・マリ・ゲーノが『民主主義の終わり』を出版したのは一九九三年で、この頃から著作の表題に「終焉」の文字が目立つてくる⁽²⁾。

かつてシユベングラーが第一次世界大戦後にヨーロッパ主義への反省として『西洋の没落』(一九一八—二二、二巻)を著わして、機械文明への警鐘とその没落を予測して以来、思想としての「終焉主義」の議論は新たな段階に入ったように思われる。その背景には国際環境の変化がある。フクヤマの著作『歴史の終わり』を例にとれば、歴史の終わりとは二〇世紀のロシア革命にはじまり東欧社会主義の崩壊でおわる現代世界の一つの体制、つまり社会主義システムの瓦解と、したがって人類社会には理念上、自由民主主義体制しか選択の余地はないと予測したことで、重要なことは「終焉」——歴史予測の論理における選択肢の限定にある。彼の場合、歴史はヘーゲル流に世界の二大對抗勢力のダイナミズムで動くのみならず、その一方の敵対勢力が消滅したので、歴史も終わったと主張した⁽³⁾。「終焉」の意味には体制選択の問題や思想原理としての自由民主主義の優位性の問題が含まれている。この著作の論点は東西冷戦構造の崩壊や市場的資本主義の急速なグローバル化を視野に収め、「近代の知」が主にヨーロッパ中心主義にある点を批判しつつ、他方で歴史のおわりを宣言したことにある。この誤解を招き易い表現を別にすれば、著者の思索の根底に広く人間の文化そのもの、とくに「リベラルなデモクラシー」という政治的価値についての問いかけが存在するように思われる。

一方先に示したゲーノの著作の場合、およそ過去二〇〇年を検討の対象に据える。すなわちフランス革命からベルリンの壁の崩壊までの時期を国家の時代として捉え、人間が国家の主権者となった近代の政治体制とその政治的枠組みである国民国家が終わろうとしているとい⁽⁴⁾。こうした彼らの言説には論点の相違が当然あるものの、ある歴史事

象の「終焉」が意識されている。その前提に彼らの世界史あるいは人類史についての認識と歴解釈があることは明かである。ともかく、世紀の転換期にあたって「歴史の終焉」という考えが思想界に広がり「終焉主義」の言説に拍車をかけているように思われる。

だが「終焉主義」の思想は何も世紀末が到来したから生まれたのではない。この歴史解釈の立場はその淵源をたどれば、後に述べるようにキリスト教思想に脈脈と流れている終末論にある。いわば西洋思想ではよく知られた思考様式の一つにすぎない。⁵⁾ 概して人間の歴史(思想の盛衰を含む)には確かにある始まりがあり、また終わりがある。では「終焉主義」でいう終末とは何なのであるのか、また終わりがある以上、人は次の始まりを期待する。何がはじまるのか。この思想は未来予測を含む歴史観の考察なしに語る事が難しい。人間の世界ではとくに現実の政治的な営みが密接に未来の事象に関わる。歴史が過去の人間とその行為の探究とすれば、政治の仕事は未来への歩みとその創造に深く関与する。もしわれわれが未来への歴史予測なしに政治的事業を展開すれば、それはきわめて危険なことといわねばならない。この点で歴史観と未来の政治像との間には本来密接な関連がある。

ではどのような関連があるのか。さしあたり政治思想の次元において、未来予測が盛んに論じられた一九世紀のヨーロッパに焦点を定め著名な思想家らの歴史観を取り上げ考えてみたい。

- (1) ポスト・モダンの思想が近代以前の権力から逃れるために依拠し、信頼してきた近代の諸思想や制度それ自体が権力的性格を帯びている点を暴露した功績は大きい。たとえばフーコーの知的営為にその典型をみることが出来る。ジャン・フランソワ・リオタール、小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』(水声社、一九八六年)は主体、自由と解放、真理など近代の概念によって構成された「大きな物語」の失墜を説明している。
- (2) 「終焉」の言葉を含んだ表題の著作は近年の出版で顕著にみられる。フランシス・フクヤマ、渡部昇一訳『歴史の終わり』上・下(三笠書房、一九九二年)、ジャン・マリ・ゲーノ、柘添要一訳『民主主義の終わり』(講談社、一九九四年)、山本雅男『ヨーロッパ「近代」の終焉』(講談社、一九九三年)、佐和隆光『市場主義の終焉』(吉波書店、二〇〇〇年)、柄谷行人『終焉をめぐる』(福武書店、一九九〇年)、セオド

ア・ロウイ、村松岐夫監訳『自由主義の終焉』(木鐸社、一九八一年)、ジャン・フランソワ・リオタール、原田・清水訳『知識人の終焉』(法政大学出版局、一九八八年)など。

(3) F・フクヤマ、渡部訳『歴史の終わり』では「リベラルな民主主義」についての議論に特徴がある。P・ハーストが「終焉主義」のもとにフクヤマの考えに言及している。P. Hirst, *From statism to pluralism*, UCL Press, pp. 197-203.

(4) ジャン・マリ・ゲーノ、『民主主義の終わり』参照。

(5) R・K・フルトマン、中川秀恭訳『歴史と終末論』(吉波書店、一九六五年)、大木英夫『終末論』(紀伊国屋書店、一九七九年)参照。

一 歴史予測と政治的共同体像

歴史予測の問題はなによりも歴史解釈・歴史観に左右される。人間の歴史をどのように解釈するのか。歴史的な事件、たとえばナポレオンが革命のさなかに頭角を現わし、クーデタで権力を掌握したあと帝政を樹立した。われわれはこの事件を因果関係で説明する。つまり歴史の因果性による解説。またこうした事件を含めて歴史とは神の手になるもので人間ではどうにもならないと見る。つまり摂理史観や歴史宿命論による解釈。あるいはコンドルセの『人間精神進歩の歴史的素描』に典型的にみられる啓蒙思想の歴史観、すなわち人類の精神を「進歩」の観念によって解き明かす進歩史観など。こうしたさまざまな歴史解釈は未来の人類の歩みに関する予測に強い影響力をもつ。なぜならそれらは人間の思考のタイプとして歴史認識を形成するにあたって基底的な役割を果たしてきたものだからである。また哲学者カントを例にとれば明らかのように歴史予測と政治との間には密接な関係があり、両者は「法則」を媒介にして捉えられている。彼の場合、「歴史」とは必然の法則による完成と解釈される。すなわち人間は潜在可能性を持つている。それを実現しようとすれば、潜在可能性を十分に実現しうる完璧な国家において生きることが望ましい。この理想の国家において個々人はともかく人類全体が完成すると考えられた。したがって人間はこの国家建設

のために奉仕しなければならない。こうした未来の共同体とそれとの人類の完成という人類史の展望は『世界公民の見地における一般史考』(一七八四)に詳説されている。⁽¹⁾

カントやヘーゲルのような哲学者は理想的な共同体の完成をもって人類史を展望したが、そこにはおよそ今日のよ
うな深刻な世界と社会との認識に立脚した未来に対する危機意識はない。その意味で彼らの予測はきわめて楽観的とい
ってよい。

さて、歴史の発展、または歴史の必然を基軸に人類の未来社会を展望し、自由の王国を想定したのはヘーゲルとマルクスである。二人とも人類の歴史を三つの段階に区分する。まずヘーゲルの場合、人間の精神、つまり自由の理念とは弁証法の論理を用いた説明を通じて「精神」が自己発展するものとして理解されている。彼の哲学的議論を「共同体」という視点から捉えて見ると、はじめに理想的な愛を根底にもつ「家族」||「共同体」があり、ついでそれが分裂し、自己の欲望追求と社会での相互依存の関係によって競争と不安定な社会||「市民社会」として現出したあと、再びより高い段階の共同体が論理として想定される。言い換えると「市民社会」のもとで生きている利己的個人が倫理的なエートスにみだされた高次の「共同体」のもとに一体化され包摂されることになる。⁽²⁾彼の言葉を用いれば「人倫的」な国家が樹立され、そのもとで各自は「自由」な人間としていきることになる(『法の哲学』第二五八節)。この論理的筋道では歴史予測と完全な国家のイメージとは切り離せない。論理の必然から説く場合であれ、歴史の発展、あるいはその必然から考える場合であれ、ヨーロッパの思想史を辿れば、歴史の予測と未来の人間社会、「自由の王国」の到来とはワンセットになっている。この歴史観の思考型は、歴史予測におけるキリスト教思想の影響の問題として捉えることができる。それは終末観的歴史認識が現実社会の変革理論としてどのように組み込まれいくかということに他ならない。この問題の核心とは「地上の楽園」建設という観念の出現にある。歴史予測の視点からみて宗教

+

改革期が重要な意味を持つのはこの問題との関連においてであるといつてよい。

(1) カント、篠田英雄訳『啓蒙とは何か』(岩波書店、一九六三年)二二頁以下参照。

(2) Z・A・ベルチンスキー編、藤原保信他訳『ヘーゲルの政治哲学』(御茶の水書房、一九八九年)「ヘーゲルの国家概念」二頁以下参照。

二 歴史予測におけるキリスト教の影響の問題

一般にユダヤキリスト教的歴史観では終末論が重要な構成要素をなす。終末論とは歴史は神の介入によって進展するという見方を前提に最後のものについての教義を示したもので、イエスキリストの復活とキリスト教徒の民の復活を信じる信仰にその核心がある。政治思想からみて終末論が重要なのは最後の時にあたって神による新しい秩序の創造、すなわち神の支配||神の国の樹立が信仰の証として提示されたことだ。

キリスト教歴史観について考えるうえで使徒パウロ(一六四)と教父アウグスティヌス(三五四―四三〇)の思想に特段の注意を払う必要がある。まずパウロは歴史と人間の関わりについて思索し、人間の歴史性に独自の見解を打ち出したからである。すなわち信仰によって義とされた人は、彼の過去・罪から解放され自由な決断で真に歴史的な生を生きる⁽¹⁾と解釈した。一方、教父アウグスティヌスは時間と歴史とは永遠の生成・発展・成熟・没落をたどる循環過程ではないとの認識に立ち、それゆえ時間には「はじまり」があり、神によって「はじまり」が創られると力説した。とくに信仰の立場から説かれた不信仰者と信仰者との闘争とは、「地上の国」と「神の国」という理念的表現によっていつそう鮮明化され、その闘争が「世のおわり」||完成まで続くと考えられた。したがって歴史とは「神の国」の勝利に他ならない。彼はそれまでの循環的な過程とみなされた古代哲学の歴史の見方に対して目的論的な直線的思考の歴史観を導入することによってこの世の終末におけるキリストの再臨を理論づけた。⁽²⁾キリスト教の終末論的

歴史観は、人々の信仰心を燃え上げらせると同時に、論理の帰結として終極目的に向かうという意味で直線的思考の発想とそれによる歴史解釈の見方に大きな影響を及ぼすことになる。

歴史予測におけるキリスト教歴史観または歴史哲学の影響については多くの研究があり、さしあたり行論の必要上取り上げる人物は宗教改革期のトマス・ミュンツァー（一四八八／八九—一五二五）である。彼は未来千年にわたるキリストの支配が地上にもたらされるといふ信仰、つまり千年王国説に導かれ、新しい神の観念の解釈と終末論的ヴィジョンを当時の歴史的現実に取り移すことで「約束の地」の意味転換を図る。⁽³⁾

ルター神学のコルネ、すなわち神への隷従がキリスト者の真の自由を意味するという解釈に対して、再洗礼派で急進的宗教改革者のミュンツァーは大胆な聖書解釈を行なう。キリスト者の自由とはまさに神の言葉を実現することであり、聖書の言葉自体が近い将来実現されるべき社会の生活規範として捉えられる。福音を実現しようとする現実の活動が神の言葉を理解する唯一の道となる。したがって彼にとって歴史とは歴史の目的を実現しようとして戦う者に目的を与え、信仰者として生きる意味を明らかにするものに他ならない。後のマルクスの歴史観を髣髴させるような見方のもとに展開される人間の墮落と退廃の歴史は五つの帝国の段階的発展史として認識されたので、終末史観に合理的解釈の道が準備される。

こうしてキリスト者の新しい自由の地は彼岸に求められるのではなく、現世の中で獲得されるべきものとなる。その意味でミュンツァーの次の言葉は興味深い。「人民は自由なり、神のみが彼らを統べることになるう」⁽⁴⁾「高度に挑発された弁護論」⁽⁵⁾「ミュンツァー著作集」。自由な人民—神—地上に求められる「約束の地」、これら三つの観念を終末論的歴史認識の枠組みと認めれば、近代的終末論は論理の道筋にある「神」を「法則」に取り替えたものに過ぎない、といえよう。ちなみにこの観念の意味交換は、歴史的現実と宗教思想との苦闘の過程の帰結であり、それ故「神」か

ら「法則」への価値転換が近代思考への歩みを意味することはいつまでもない。

ところで歴史予測の問題では究極の目的、つまり実現されるべき理想の秩序とは何かが問われている。キリスト教の場合、とくにアウグスティヌスに見られたように「神の国」と「地上の国」との対抗関係の中でそれが描かれイメージ化されたにしろ宗教的共同体の建設（理念的な彼岸的なものであれ教会のような目に見えるものであれ）そのものに優先的価値があった。にもかかわらずこの宗教的神学的議論には人間の究極的な倫理目標の追究や政治秩序の道徳的基盤は何かという重要な問題が含まれていた。こうした議論が世俗の道徳論議と無関係に行なわれるはずはなく、近代的終末観が両者の思想的絡みに現実性の契機を導入することになる。だからミュンツァーのように聖書に告知された神の子の友愛を無視する現実の社会に非妥協の態度を貫く牧師が宗教改革期に輩出したことは注目しておかねばならない。思想は肉体をもつ個々の人間の表現活動を通じて浸透していくからである。真のキリスト教共同体の実現こそ聖書のメッセージと受け取り解釈した彼の終末論は、近代の世俗の終末論的歴史認識に転換され、再解釈される素材に十分なりうるのである。

(1) R・K・フルトマン、中川訳『歴史と終末論』五〇頁以下参照。パウロの歴史理解は終末論によって決定されている、とフルトマンは指摘している。五二頁。

(2) アウグスティヌス、J・W・C・ワンド編、出村彰訳『神の国』（日本基督教団出版局、一九七五年）、加山真路「アウグスティヌス—神の国と政治」（藤原・飯島編『西洋政治思想史』I、新評論、一九九五年所収）五九頁以下参照。

(3) マリアンヌ・シヨープ、倉塚平訳「トーマス・ミュンツァー—新しい神観念と歴史の終末の問題—」（シャトレ、竹内良知監訳『哲学史Ⅲ 近代世界の哲学』白水社、一九七六年）一九頁以下参照。

(4) ミュンツァーの五段階の歴史区分とは以下の通りである。第一の帝国は黄金の頭によって象徴されるバビロン帝国、第二の帝国は銀の胸と脳によって象徴されるメディアとペルシア帝国、第三の帝国は知性によって示され、青銅によって象徴されるギリシア人の帝国、第四の帝国は剣によって獲得された強制の帝国、すなわちローマ帝国、第五の帝国は眼前に展開されているもので、鉄からできている。前掲論文、四三一—四

四頁。聖書を正しく解釈して、この五大帝国の法則を認識することの必要をミュンツァーは説いた。
(5) ショーブ、前掲論文、四四頁。

三 一九世紀ヨーロッパにおける歴史予測とその特徴

今日から見ると、一九世紀ヨーロッパは概して楽天的な歴史予測が盛んに行なわれた時代といつてよい。なぜこの世紀にはこうした予測が優勢になったのか。その要因を検討してみると、まず啓蒙思想の進歩史観やダーウインの生物進化論の影響、産業革命と産業技術の発展、ユートピア的社会改革者の描く理想的未来像の普及などが考えられる。周知のように楽天的な歴史予測の普及に多大の影響をおよぼした人はフランス革命期の数学者コンドルセ(一七四三—一九四)である。百科全書派の一人であった彼は「人間精神の進歩に関する歴史的展望の素描」(一七九三—一九四)を執筆し、人間の完成は真に無限であること、またこの完成への進歩は無限で逆行しないと主張した。⁽¹⁾

進歩に対する信仰に裏打ちされた彼の理論は救済史観と異なり、合理的で人道主義的な立場と人類の発展は法則に従つという発展法則の観念から成り立っていた。人間とその未来にたいする揺るぎない確信が生まれてはじめて楽天的な歴史予測は成立する。モリス・ギンズバークの次の一文はこの主張を解釈するうえで示唆に富む。「人間には自分の未来をつくっていく能力と義務があるのだとする観念が広く行き渡るようになるのは、人々の関心が来世から現世に移り、そして法則性という考え方が自然の領域から人間の領域へ広がって後のことであつた」⁽²⁾。まさに法則の観念の普及と「社会」の概念が発見されるのは十九世紀である。

すでに述べたように人類は五つの時期を経て千年王国に到来すると説いたミュンツァーがいたが、これは終末史観からする歴史の発展法則的解釈といえるだろう。だが進歩の観念と法則性の認識を結合した一九世紀の歴史予測の特徴には産業革命と科学技術の発展が刻印されている。この要素との関連なしに歴史予測における法則性の問題は語れない。

問題は「法則」とは何かである。この世紀では進歩の観念と法則的認識とは不可分なものと考えられていたので、両者の関連を念頭においた検討がある。すでに触れたカントは哲学的見地から人間の意志の現われである行動には普遍的法則が適用できると考えていた。すなわち人間の自由意志の営為を全体として考察すると、歴史に、「規則正しい過程」が発見できるといふ。⁽³⁾ コンドルセやチュルゴなど一八世紀の多くの啓蒙思想家が抱いていたカント的な意味での「法則」観念は、一九世紀になると人間社会の諸事象の発展を人類の普遍史という視角から法則的に捉えようとする思考態度に接合される。その態度は進歩の観念に嚮導されて、サン・シモンやマルクス、またコントやJ・S・ミルらの歴史認識の基礎となる。彼らは自然の法則が不変であるように人類の歴史にも発展の法則があるとの立場に立ち、その知性を傾注して歴史発展の法則の発見と公式化に努めた。歴史の「法則」とは「進歩」の観念に支えられた人類の発展段階説といつてよい。

さて、国家の死滅をつとに予測したサン・シモンの歴史法則とは、人間の思考を二段階に区別し、歴史の連続性を進歩の観念で説明する。⁽⁴⁾ すなわち思考の憶測的・神学的段階から実証的科学的段階への進歩であり、それに対応して社会政治体制も封建的神学的体制から産業的科学的体制へと進歩する。とくに彼が注目したのは一九世紀に飛躍する科学と産業の力である。この二つの力を用いて彼の構想する「産業社会」が組織されると、生産力の増大の結果、大衆の物質的欲求を満足させうる将来社会が到来すると予測した。この将来社会では人の他の人間に対する支配は自然物にむけられるようになり人間に内在した支配欲が事物へと転換される。つまり事物の支配・管理が社会の組織の基本となるので、科学的法則に基づく統治が可能となる。その意味で従来の政治的領域そのものが全体として縮小され、

究極的には消滅することが約束されるのである。⁽⁵⁾彼にとって国家の死滅とは以上のことを意味するレトリックな表現に他ならない。

次にサン＝シモンの弟子A・コントは師以上に包括的で体系的な文明の歴史の一般法則というべき理論を構築した。よく知られた人類の知識における三段階発展説である。

彼は「社会」に関する科学が存在するとの確信のもとに歴史解釈における科学性とは真理を発見することであつて、それは法則認識以外のなにもでもない主張した。彼によれば、人類の思考形式の発展は神学的(宗教的)・形而上学的(哲学的)・実証的といつ三段階の進歩をたどり、最後の実証的段階では科学が支配する。⁽⁶⁾一見単純にみえる人間の知性を三段階の継起で捉える精神史の認識は諸科学の階梯といつ理論で補強されている。といつのは諸科学はそれぞれ異なつた速度で進歩してきたからで、いわば分類学的手法によって先行科学と後続科学との論理的順序が示されるのである。

すなわちコントは諸科学が対象とする複雑な現象に分類学的手法によつて一つの上昇系列へと分類する。第一は数理的諸科学(代数学、幾何学、力学)、第二は天文学、第三は物理学、第四は化学、第五は生物学、そして第六に社会学あるいは社会科学が位置する。社会学の対象である社会諸現象はそれ以外の主要な諸真理に依存しそれなしには理解されないからである。J・S・ミルは、コントの体系的な分類の序列の一端を次のように要約して説明している。いま分類と法則との関わり部分を引用しておこう。「化学的現象は(それ固有の法則の他に)すべての先行する科学、中でも特に物理学、そして物理学の中では特に熱と電気の諸法則に依存する。また生理学的諸現象は、物理学および化学の諸法則に加えて、それ自身の諸法則にも依存する。人間社会の諸現象はそれ固有の法則に従つとはいへ、そのみに依存するものではない。それらは有機的生命一般と動物の諸法則に依存するのみでなく、無機物質の

法則に依存する。無機物質の法則は生命に対する作用を通じて間接的に社会に影響を及ぼすにとどまらず、社会がその下で運動する自然環境を決定することによつて直接にその影響を及ぼすのである。⁽⁷⁾J・S・ミルの説明から理解できるように、コントの法則概念とは分類序列にしたがつて各々の科学はそれぞれ特殊真理に加えてそれに先行するすべての諸科学の真理を基礎とし、究極的により高位の法則に収斂していく思考形式の関連性全体を意味している。

以上検討してきたように人間精神の知的発達と社会の発展に「段階」を設定し、その「段階」を辿る不可避なコースを「法則」の概念でもって認識すること、この精神態度こそ一九世紀の主な思想家に共通に見られるもので、彼らの歴史予測はこの顕著な態度ぬきには考えられない。サン＝シモンの思想に典型的に描かれていたように楽天的未来像は、進歩の観念の信仰に支えられた「法則」的解釈による歴史観の生み出した帰結に他ならない。進歩のもつ価値を絶対視し、論理の必然性に人類の未来についての夢を仮託すれば、その予測が楽天的性格を帯びるのは自然である。だが科学的知識による真理の探究、つまり法則の発見という命題はまさに真理の半面しか意味しないのではないか。そのことは善き社会の追求という倫理的次元の問題が背景に押しやられる傾向を助長する。言い換えると科学主義の問題性を歴史予測はすでに孕んでいたといつてよい。

さてマルクスは単純な進歩史観の持ち主ではなかつたが、人類史の発展を生産力の観点から描いた壮大な鳥瞰図では未来社会像は極めて楽天的に予測されている。「共産主義社会のより高い段階で、すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働がたんに生活のための手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となつたのち、個人の全面的な発展にもなつて、またその生産力も増大し、協同的富のあらゆる泉がいつそう豊かに湧きでるようになったのち——そのときはじめてブルジョアの権利の狭い限界を完全に踏みこえることができ、社会はその旗のうえにこう書くことができる——各人はその能

力におうじて、各人にはその必要におうじて」(『ゴータ綱領批判』)。この予測では人々の政治的営為の中心、つまり支配については言及されていない。人間の人間に対する支配の問題は解決しているという前提があるからである。

マルクスの歴史観を検討してみれば明らかのように、そこには法則的な歴史予測とユートピア観念の関連が指摘できる。一般にマルクスの言説は「科学的」と捉えられることが多いが、歴史予測に関して言えば、人類史の長期の展望を含む歴史観のもとに形成されたユートピア思想の影響も看過できない。すなわち彼の歴史観はいわゆる生産力の増強の視点を重視した唯物史観に基礎づけられているものの、明らかに予言的傾向をおびた言説が歴史・社会理論と入り混じっている。その際、重要なことは、彼にとって必要な人間とは「理性的」人間であり、歴史過程の本質と法則に対する洞察ができるのはこのタイプの人間だみなしていた点にある。歴史に訴え、現存秩序を告発する場合も人間の邪悪さではなく、それを社会発展の法則の生み出した帰結として告発する。こうしたマルクスの科学主義の立場に強い疑念を示す思想史家に例えばI・バーリンがいる。⁽⁹⁾

一九世紀に生きたマルクスは、前世紀の啓蒙思想の発展的な進歩史観と歴史の法則的解釈の影響を強く受けた。すでにふれたような同時代のコントの三段階の法則説、人間精神の必然的進化の階梯についての理論は、時代の思潮となっていたのである。確かに彼は歴史の基礎科学としての経済学を重視したが、経済学への批判的な取り組みは社会革命のヴィジョンと密接にむすびついていた。つまり彼にとって経済学とはまず資本主義社会の土台をなす経済的領域に現象する商品＝貨幣・資本の運動法則の解明にあり、この作業を通して「科学」としての社会を認識することにあつた。その批判的認識の作業とは資本のくびきから労働者階級の解放を実現するという実践的意図に役立てるために他ならない。彼はエンゲルスとともに史的唯物論を構築し、労働者階級の人間解放のために壮大な人類史のドラマを描いてみせた。その理論の核心とは、資本主義社会の崩壊と社会主義革命による新しい世界史の第一段としての社

会主義社会の到来である。その後には「自由の王国」が展望されている。有名な『共産党宣言』の掉尾を飾る一節を引用してみよう。「階級と階級対立をとともなうふるいブルジョワ社会にかわって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるような一つの協同社会があらわれる。」すでに引用した『ゴータ綱領批判』の未来社会像はこの宣言の社会像と重なる。この未来像の関連性に注目すれば、「ユートピア」の観念が彼を強く捉えていたように思われる。

なるほど彼はヘーゲルと異なり人間の意識活動が人間自身によって形作られ、それが現実の発展と進化の全過程の反映であると理解していた。同時に人類史に客観的所与として「法則」が存在し、その認識の延長線において未来が展望できるという信念をも抱いていた。とはいえ「法則」的認識による歴史説明の方法的弱点には気づいていなかったのではないが。例えば、歴史状況におかれた個々人や集団に属する人間が自らの「良心」を曲げて組織防衛に走り、大局的観点から見れば、「国民」の利害を裏切るという個々の人間に潜む悪行、利害の絡む組織による強制あるいは個人と組織との緊張関係にはほとんど注意が払われなかったように思われる。

一方、歴史予測からみた場合、マルクスの歴史理論に重大な問題があつたことは二〇世紀末での東欧社会主義社会の崩壊が示している。歴史の必然性、つまり科学的「法則」から導き出された歴史理論自体に問題があつたのみならず、人間のもつ強い「欲望」への情熱とその役割が軽視されたことにも問題があつた。言い換えると、人類が理想とする未来社会への展望は資本主義の市場経済が刺激した人間の「欲望」それ自体に打ち砕かれたように思われる。この現象は人間の理性と理念の敗北を意味するのか。この問いには人間の歴史の根底には理性と情念との相克・葛藤があるとすると、マルクスが若い時代に思想的に対決し、また規定されたヘーゲルの思弁的な歴史哲学の枠組みでは到底説明しえない。すなわち「物質」と「精神」の二元論のもとに精神の優位を説き、物質も精神の現われの一つと仮定

したヘーゲル哲学の思考それ自体を転倒したマルクスでは、逆に「物質」の優位の思考と論理の「科学」性によって個々の人間とその集団に内在する「情念」の要素が観念的世界を導導する場合が軽視されたといえよう。西洋における歴史予測と政治との関連性は別の視点から検討してみる必要がある。

その視点とは社会構造の変容と政治システムの関連を社会心理的な要素を加味して分析し、その認識のうえに政治社会の未来を予測したトクヴィルにみられる。

マルクスと同時代にいきたトクヴィルは一九世紀の前半にあつていち早くヨーロッパ社会に「デモクラシー」(平等化)時代の到来を予測し、また今日の大衆社会の出現を予言した。彼はマルクスのように壮大な歴史理論を構築したわけではなかったが、歴史の予測の立場から見ると、彼の予言はほぼ的中している。長期予測の難しい歴史考察でそれが可能になった根本的理由とは何か。トクヴィルの場合、歴史認識は歴史の必然論や単純な進歩史観の理論によつて組み立てられたものではない。したがつて体系的な法則認識に導かれて未来の予測がなされたのではない。彼は歴史の進歩に懐疑的な立場に立つて、人間歴史の歩みそれ自体は不可避なものとして受けとめた。つまり社会における趨勢・傾向、それが「デモクラシー」であつたが、『アメリカにおけるデモクラシー』の序論に端的に示されたよつにこの潮流を冷静に文明的視点から分析し、人類社会の未来を展望しようとした。まさにトクヴィルの平等化への着眼とその政治的・社会的、また文化的帰結、また価値判断を伴つ個人の自由・人間の品位という思想的立場からの洞察にその理由が求められる。若い貴族トクヴィルは「いったいわれわれはどこへ向かおうとするのか」と歴史に問いかけ、その答え求めてアメリカへの旅が始まる。⁽¹⁾

彼はマルクスのようにブルジョワ階級を歴史の舞台から退場するものと断定せず、またプロレタリア階級に特定の歴史的使命を付与し、プロレタリアの人間の解放ということに強い情熱をもっていたわけでもない。トクヴィルの自

+

+

由社会実現への情熱は「デモクラシー」社会、すなわち平等の原理が社会に浸透し平等化のダイナミズムが不可避的に画一化・均質化を助長する社会では、個々の人間の自由や個性はどうなるのか、という問いに源泉があつた。それ故、彼はJ・S・ミルのような多くの同時代の自由主義者と同様に自由な社会の樹立を希求し、その到来のために知的営為を傾けることになる。

ではなぜ積極的な価値をもつ平等の原理と平等化が社会における個々人の自由を制約することになるのか。彼の場合、この問題を解く鍵として平等の原理の長所を評価しつつ負の側面、つまり平準化・画一化の現象に焦点をあわせて議論したことにある。「平等」という価値には一人ひとりの人間を独立と自由へとむかわせる情熱・志向があるのに対して、画一化・平準化としての「平等」は個々の人間の没個性を生みだす。その要因には例えば社会における相似た多数は「匿名の支配」としての「世論」を形作り、またそれをたやすく受け入れる(トクヴィルの表現を借りれば「多数の専制」)。彼らには慎ましいが強い「物質主義」への欲求があり、精神的価値より物質的価値に愛着をします。それを獲得すれば、外見上「所有」の平等の目印として示し易いからである。もちろんこの志向は産業化の促進と表裏一体の関係にあることを彼は見落としてはいない。また社会にはせまい私的生活の領域にとじこもり、公的領域の問題に無関心な人々が増大し「個人」本位の生活態度、つまり「個人主義」がはびこる。社会においてお互いが均質的・類似的な傾向を助長するがゆえに、彼らは同類の上になつた強い「他者」の出現を期待し、一方で彼らから抜け出た「他者」としての優位者に自らの判断をあずけようとする。この「デモクラシー」社会に作用する心理のダイナミズムが人々の自由でありたいという意識と裏腹に隷従意識を助長する、と彼は考えたのである。

トクヴィルはこうした社会生活上に現われた「デモクラシー」の影響を「大衆」の形成の観点で把握し、この現象と政治社会との関連を総合的に考察する。「人民主権」の原理にたつた代表制民主主義では選出された代表がいつの

まにか「主権者」に代位してしまつ。人民は選任した政治家代議士を信頼し、彼らを批判することは自分を批判することだと錯覚するよつになる。こつした議会制度と近代的行政的集権化の結合した政治メカニズムの行く末に「柔らかい」専制が誕生するであらう。トクヴィルの大衆社会と政治像の予測を略述すると、以上のよつになる。¹⁾

ところで、政治思想から見て注目すべきことは、いままで述べてきたことから明らかなよつに歴史の予測に人間の政治的営みの基軸となる政体のイメージが不可分なものと位置づけられ、未来の政治社会像の樹立問題に積極的な役割を果たしていることにある。未来の政治社会像の提示のない歴史予測はほとんどない。同時に西洋では歴史予測を支えてきた中心の観念とは「終焉主義」に他ならず、「進歩」の観念がそれに結びつく。それゆえ、問題は二つの側面から検討しなければならない。

まず歴史予測の射程とはトクヴィルのよつに百数十年先の未来と見るか、あるいはマルクスの歴史理論の根本をなす史的唯物論のように壮大な人類史の展望、つまり超長期のものとして語るのか。いずれにしろ予測の時間幅が問題になるだろう。トクヴィルの場合であれば、長期予測といつてもそれは近未来的性格のものとして押さえてよい。他方、マルクスの場合であれば、おそらくそれはユートピアと考える方が議論の深化に役立つ。もつ一つの側面とは、国制循環論と歴史予測との間に見られる関連の問題である。

- (1) コンドルセ、渡邊誠訳『人間精神進歩史』第一部 第二部 (岩波書店、一九五一年) 参照。
- (2) E・R・ドッズ他著、桜井他訳『進歩とユートピア』(平凡社、一九八七年)、「近代における進歩」七一頁。
- (3) カント、『啓蒙とは何か』、二三頁。
- (4) E・R・ドッズ他著『進歩とユートピア』九一頁以下参照。サン＝シモンの実証科学と産業による社会の再組織論については、中村秀一『産業と倫理——サン＝シモンの社会組織思想』(平凡社、一九八九年)第三・第四章参照。
- (5) シェルトン・S・ウォーリン、尾形他訳『西欧政治思想史』V (福村出版、一九七八年)六四頁参照。サン＝シモンの場合、人間のエネルギーが人間の支配欲望からくる他者支配から自然の支配へ、その目標が転換されると見た点に、楽天的な人間観の一端が示されている。人間には事物も人間も支配しようとする欲望を消滅させることはできないからである。

- (6) コント、霧生和夫訳『実証哲学講義』第四卷 (「コント・スペンサー」責任編集清水幾太郎、世界の名著四六、中央公論社、一九八〇年)二七九頁以下参照。
- (7) J・S・ミル、村井久二訳『コントと実証主義』(木鐸社、一九七八年)四三―四四頁。
- (8) 大内・細川監訳、マルクス・エンゲルス全集第十九卷 (大月書店、一九六八年)「ドイツ労働者党綱領評注」二二頁。
- (9) I・バーリン、倉塚平他訳『カール・マルクス』(中央公論社、一九七四年)。バーリンはマルクスのユニークな側面を高く評価しつつ、同時に「科学的狂信者」と断言している。マルクスの歴史による断罪をバーリンは厳しく批判したといえる。同訳書一〇―一二頁。シュロモ・アウネリ、中村恒矩訳『終末論と弁証法』マルクスの社会・政治思想 (法政大学出版局、一九八四年)一八七―二九頁、三一一頁以下参照。
- (10) Tocqueville, *Œuvres*, II, Edition publiée sous la direction d'André Jardin, Gallimard, 1992, cit. p. 14. トクヴィルについては拙著『フランス市民社会の政治思想』(法律文化社、一九八一年)、松本社二『トクヴィル研究』(東京大学出版会、一九九一年)参照。

- (11) 拙稿「トクヴィルを読む——未知なる力としての「テモクラシー」と「国民」の観点について——」(立命館大学人文科学研究所『紀要』NO. 72, 一九九八年)を参照。

四 歴史予測と国制循環論との関連性

歴史予測に関する思考枠組みには波動型や循環型や直線型などがある。近代以降の歴史予測が主に過去から未来へと進む直線的思考にあるのに対して、政治形態の論議といえは、古代から循環論の発想による議論が支配的であった。それは西洋の政治思想の伝統に属するもので、プラトンやアリストテレスの著作に典型的に見られる。だが、まず政治体制の循環という考えを歴史的知識に結びつけたのはローマ時代のギリシアの歴史家ポリュビオス (Polybios, 前二〇三年頃—一三〇年) だと言われている。彼は、ローマ国制の卓越性を認め、それが君主政治・貴族政治・民主政

治の融合する点にあると捉えた(混合政体論)。もちろん政体、ないし国制の循環という観念は「進歩」という観念とは別のもので、墮落と衰退の組み合わせ、つまりそれはギリシア神話の運命の神モイラの仕事とみなされた。人間の支配を超えた予測・予知不可能なことがらに人間の意志と行為が大きく関わってくるのはわれわれが「近代」と呼ぶ時代になってからである。その思想的営みをささえたものが「進歩」の観念とその歴史観に他ならない。この視点からみると、近代のアメリカとフランスの革命、とくにフランス革命は意義深い。革命の進展過程でブルボン王政の廃止に続いて、歴史の進歩発展の観念で理論武装された第一共和政(一七九二・九)が樹立される。いご幾多の変遷のなかで共和政治・民主政治は理念上未来の歴史を切り開く政体と位置づけられていく。伝統的な循環的国制思考の枠組みはすでにアメリカ独立革命によって衝撃を受け、フランス革命によって破砕されたといえる。政治思想の視点から見れば、近代の市民革命の成果とは普遍的な人権思想の宣言の他に、共和政が実現されるべき政体の目標に設定されたことにある。近代革命こそ政体認識の転換をはかる画期となった。

明らかにヘーゲルを含む一九世紀の多くの思想家たちは、この革命から貴重な思想的帰結を引き出していた。たとえば、トクヴィルの歴史予測によれば、ヨーロッパの未来社会とはアメリカのような「デモクラシー」社会と共和政体となるか、ロシアのような専制政治となるかのどちらかで、人々には二者択一の道しかないのである。⁽¹⁾その後、二月革命の目撃者となった彼は、「民主的自由」の理念の必要をと見え、民主・革命派の「社会的共和国」の志向に對峙して歴史哲学的思索を深めてゆくことになる。思索の流れとは後者の主張が集権化を促進し、論理の発展をたどれば「羨望感情に過ぎないエガリテ」が「社会主義・共産主義」を生みだし、また自由の欲求と指導の必要とを感じる人々が両者を満足させる方向を求め、そこには「唯一の後見的全能的権力」の樹立を望む政治的風土が形成されていく。そうした諸傾向が新しい専制政治への道を開くというのが彼の予測の核心となる。⁽²⁾

+

+

ところで二〇世紀にいきたM・ウェーバーの場合にはもはや歴史予測における政体構想はさほど問題にならない。

一九世紀ヨーロッパの思想的遺産のうち何が問題になるかといえば、それは「社会」の概念と官僚制との関連といつてよい。すなわち肥大化する組織とその機能への着眼にある。彼はつとにヨーロッパ社会の未来に官僚制が社会に生きる個々人に隷従を強いる「檻」として立ち現われるのではないかと予測していた。⁽³⁾形式技術的な見地から見れば、近代における官僚制的行政組織はそれ以前の制度に比べてもっとも合理的な組織形態である。官僚制が素人行政かのどちらが優れているかといえば、それは官僚制に軍配があがる。概して世界が人間の「理性」の支配を認めそのもとの合理的活動が一般化すれば、魔術の世界が生き長がらえることは難しい。つまり社会における合理性が浸透し、その領域は当然拡大される。だが官僚制組織ではそれぞれが役割分担として「専門」をもつとはいえ、それは組織という巨大な歯車の「こまとしての役割にすぎない。このようにウェーバーは人間と組織との関係に視点をおき、彼らの組織における存在論的意味を洞察した。彼にとつて未来社会の予測とは「組織の時代」を前提にしてその肥大化傾向に對処する知的営為と結びつくことになる。そしてこの問題はただちに「社会」の観念の形成というより根本的な問題にわれわれを導く。

近代官僚制や近代工業の発展、つまり近代文明が人間の存在形態を規定し、そのもつとで意識のあり方も変化してゆけば、当然新しい知見が生まれ、その結果、広く思想と認識の世界に「社会」の観念が形成されてくる。この観念の持つ意味は重視されてよい。古代ギリシアであればポリスの動物と理解された人間は、近代以降まさに「社会的動物」となる。そしてこの社会は存在し、その科学的な解明は可能であるとの信念が近代に誕生したのである。「社会」を科学的に認識すること、歴史予測の作業が不可分の関連にあたことはすでに触れた。科学研究の核心は事実と観察に基づく。あとから見ればポナルドやメーストルのような反動的な思想家もサン・シモン、コントやマルクス

のような人類の「進歩」を信じた思想家も「社会」と格闘しその概念の普及に貢献した、といっても過言ではない。すでに述べたように一九世紀に生きた知識人の信念、つまり社会現象を支配する法則の存在とその法則の発見可能性、また法則の事物への関与、言い換えると歴史の偶然性と必然性の問題についての思索、こういったことが思想家の世界観の形成に影響を及ぼし、彼らの歴史予測そのものに制約性を付与していく。その制約とは彼らが広く社会現象に関する思考の過程においてつねに「社会」の觀念を優位におき、「政治」の役割の劣位を増幅させたことにある。すなわち、彼らにあっては「社会」がすべてであるため、「政治」の領域が極端にせばめられることになる。

例えばすでに触れたサン＝シモンの人間の支配からものを管理する社会への主張は、この認識の変化を反映したものと見える。彼にとつて未来社会はものの管理と組織を重点に置くことによつて、それまで人類を悩まし続けてきた人間に対する人間の支配（支配と服従の関係）はなくなると明言する。⁽⁴⁾「社会」という觀念の肥大化と、「社会」が人々の意識に大きな比重をしめるにつれて、「政治」の役割と意味は後景に退き、またその領域についての認識は社会の未来構想にあつて付随的なものとしてしか作用しなくなる。こうして一方では未来社会の展望における政治の構想の位置と役割は軽視される。他方では社会自体の組織化はますます進展する。

ところが実際には産業化の進展や国家の公的業務の拡大の結果、近代国家も組織の整備と強化に努めますます行政的に肥大化の方向を歩む。将来社会にリヴァイヤサンの国家の出現を予言するのか、あるいは国家の死滅を予測するのか。国民国家の将来について論者のイメージは各人各様でトクヴィルとマルクスではまったく異なってくる。

そのうえ制度的な国家の死滅を予測したマルクスでは、もともと国制循環論的な発想がなかったが、政体論の次元では民主的ないし共和的国家の到来を近未来社会に想定していたことは確かである。つまりどのような政体を望むのかという政体選択の問題では共和政は自明の理として受け入れられていたといつてよい。同時代のJ・S・ミルの場

+
+

合では、代議制統治・議会による政治が最良のものとして推奨される。それはまた人間とつて理想的な政体とみなされる。⁽⁵⁾したがつて政体の価値判断に関してはトクヴィルのような二者択一の提示の仕方はされていない。進歩史觀の持主の思想家たちは概して民主的共和政体をデモクラシー原理との関連で支持した。撰理史觀やキリスト教的歴史觀にたつ思想家の場合にはせいぜい立憲君主政が容認されたにすぎない。

二〇世紀末から見ると、一九世紀の進歩史觀を前提に未来社会の統治形態を構想し、歴史的予測にまで言及した思想家はごくわずかである。この点でJ・S・ミルの『代議制統治論』の歴史的意義は極めて大きい。一方、トクヴィルは「デモクラシー」社会とその統治形態の予測ではミルとは逆に新しい専制、「民主的専制」の可能性について語った。(『アメリカにおけるデモクラシー』第二巻第四部第六章)。では二人の代表的自由主義者の統治形態の予測はなぜ相違したのか。

その理由としてトクヴィルは政治とその社会的基盤との関連性に着目して将来社会を想像しようとした。すでに述べたように「デモクラシー」社会の負の側面が彼には洞察されていたからに他ならない。だがJ・S・ミルとつてこの関連性の分析はトクヴィルほどに力点を置いて追究されていない。彼は中期的な将来展望のもとにもつぱら民主的統治制度の利点を全面に押し出し、当時の議会改革の促進のために議論の活性化を狙つたと思われる。

(1) Tocqueville, op. cit., p. 482. 彼はアメリカ人とロシア人とを対比し、アメリカ人が自然のもたらす様々な障壁と闘い、一方ロシア人は人間と闘っていると述べ、個人の力と理性を自由に活動させ、それに統制を加えないアメリカ人と社会におけるすべての権力をいわば一人の人間に集中させるロシア人とに類型化して、二つの国の将来像を提示した。

(2) Ibid., p. 838. 田中治男『フランス自由主義の生成と展開』(東京大学出版会、一九七〇年)一四三頁参照。

(3) ウェーバーは、階層的に段階づけられた服従関係をともなう官僚制組織が将来益々発展し、未来の特徴を「未来は官僚制化のもとにある」(三六一頁)と述べ、また「生命ある機械は生命なき機械と手を結んで、未来の隷従の檻をつくり出すように働く」と主張した。ウェーバー「新

秩序ドイツの議会と政府」(『マックス・ヴェーバー政治論集』二二)のみずす書房、一九八二年)三六三頁。

- (4) シェルトン・S・ウォーリン、『西欧政治思想史』V、六四四頁参照。サン・シモンはこう記す。「自然に対する人間の能動性の発展によって、「人間の支配」が自然物に向けられるようになったために、支配という行為にともなう感情はその方向を変えてしまった。人間に命令しようという欲望は、自然をわれわれの意思に従って作り上げ、改造しようという欲望にゆくりと変ってきた。」また『組織者』には次の一文がある。「学問、芸術、技術によって、社会の繁栄というはつきりした目的のために組織された社会においては、社会が進むべき方向を定めることも重要な政治的行為は……社会体それ自体によっておこなわれる。……そのとき、命令の活動であるかぎりでの統治の活動は、零に、あるいはほとんど零になる。」[L'Organisation, XIX, pp. 197-198]。阪上孝によれば、サン・シモンの考える政治とは社会の全体構造のなかの一部分的領域としての政治のことではなくて、社会の全体構造そのもの、その組織原理のことであった。阪上孝『フランス社会主義(新評論、一九八一年)四七頁。だが、「政治」概念をこのように拡張して捉えることにすでに問題がある。政治と社会とは等質的に置きうるものでないからである。
- (5) J・S・ミル、水田洋訳『代議制統治論』(岩波書店、一九九七年)九七頁参照。ミルは言う。「単一の小都市を超えた共同社会において公共の業務のうち若干のきわめて小さな部分にしか、すべての人が自分で参加することはできないので、完全な統治の理想的な型は、代議制でなければならないのである。」同訳書九八頁。

おわりに

現在の思想界における「終焉主義」(Endism)に関する言説は、流行の様相を呈しているものの、注目を集めたいくつかの著作は単なる現状分析論や時論をこえた豊かな思想的営為の産物といえる。そして以上の叙述から明らかのようにこれらの著作は、おしなべて、西洋の思想的伝統に深く根差した歴史観やユートピア思想などの影響を受けているのみならず、近代の生み出した文明とその知的営みに対する根本的批判を含んでいる。それゆえこうした言説の考察にはさらに多くの時間が必要であろう。もちろん現在の「終焉」論は、とくに冷戦体制崩壊前後に発表されたこの種の議論は一九五〇—六〇年代に盛んに論じられた「終焉」論議、たとえばD・ヘル『イデオロギーの終焉——

+

九五〇年代における政治思想の枯渇について——』(The End of Ideology: On the exhaustion of political ideas in the Fifties, 1960)とは異なる。ヘルの場合、イデオロギーの終焉とは同時に「ユートピアの終焉ではない」、また一九五〇年代の欧米の高度産業社会の形成を背景にしているの¹⁾で、「ミニムムとファシズム思想の凋落に力点をおく描写になっている。さらに反マルクス主義の立場が鮮明で、「イデオロギー」の終焉とは政治における狂信主義と絶対的信念の終わり、一枚の青写真にしたがっていつも容易に社会改革できるといふ人智の「傲慢さ」の放棄を意味するものといつてよい。

一方、レイモン・アロンはついに『歴史哲学序論』(Introduction à la philosophie de l'histoire, 1938)を発表し、実証主義と科学的合理主義への疑問を提示した。この著作では歴史過程における人間の創造的・主体的役割をすべて歴史の必然性に解消してしまう非人間的思想が批判され、同時に歴史解釈における多元性が論じられた。全体として人間の回復を願う強い情熱のもとに示された彼の意図は、歴史認識と政治的行為との関係における可能な選択の内容を明確化することにあつた。¹⁾

ところがF・フクヤマの『歴史の終わり』はこうした議論の方向とは相違する。この著作の掉尾で彼は「人類の乗った「幌馬車」の終着駅」という一節をもつけ、よく似た形の幌馬車の隊列は結局、同じ町にたどり着くと記す。「人類は、さまざま美しい花を咲かせる無数の芽といつより、むしろ一本の道をひと続きになって走る幌馬車の長い隊列に似てくるだろう。」つまり人類の均一化の傾向と一つの目的という思い込み、そしてこのような想定との関連での「民主主義」の問題性が語られる。この想定は歴史の多元的解釈を強調したレイモン・アロンの考えとはかけ離れる。また詳しく論じてきた一九世紀の歴史予測に関する叙述と対比すると、比喩に富み絵画的ではあるが、未来の社会構図とその政治像としてはきわめて貧弱であろう。というのは人間の抱える問題の最善の解決策として「リ

ラベルな民主主義」が議論の基礎にあり、それが最適の政治システムであるとする価値判断があるからである。総じてこうした問題提起からなにが生み出されるのか。アメリカでも「ラジカル・デモクラシー」論が注目を集めている。政治とシステムとしての「デモクラシー」が未完のプロジェクトであるとすれば、グローバル化という巨大な変化に対応する理念とシステムの構築が急がれる。

ともあれわれわれは、一見楽観的に描かれる現代の「終焉主義」の未来図をどのように考えたらよいのであろうか。現在に生きる人類には全体主義と第二次世界大戦という実に悲惨な体験がある。歴史予測の問題では政治体制の構想問題を含めて議論することは、この体験からすれば大変重要であり、最適な政治システムを求めるさらなる議論を放棄してはならない。それは「ヨーロッパ連合」のような形で進むのか、一国での政治構造の再編成・変革を通じて構築されていくのか。いずれにしろ、そうした試みは歴史感覚を具えた「市民」の形成と不可分のものであることはいうまでもないであろう。

歴史の終焉論は明らかに歴史予測の問題を含まざるをえない。その予測では未来社会像と政治との関係がどのようなものかがつねに問われる。古代ギリシアの哲学者たちならば、国制の循環論の立場から優秀者支配(王道)か僭主独裁制(霸道)か、という二者択一の政体論を提示するであろう。だが近代以降事情は一変し、歴史と人間の関連が重視され、歴史予測の問題に歴史の担い手論が導入されることになる。マルクスは周知のように歴史の担い手としての「プロレタリアート」に期待をかけ、彼らが人間的に解放される社会を夢想した。一方、F・フクヤマの場合では、歴史の終わりに登場するのは「最後の人間」である。彼によれば、この人間は歴史が無目的な戦争に満ちていたことに気付いているので、ある大義に生命を賭けるような愚行はおかさない。したがって、彼らは価値の視点からみれば、「相対主義」に傾斜することになる。人間に「理性」と「欲望」と「気概」の三要素があるとすれば、彼らには「気

概」部分がないとF・フクヤマは断言する。マルクスにしろF・フクヤマにしろ、いずれも政治的主体の形成に目を向けている。歴史予測に関わる議論を思弁哲学に終わらせないためにも、この問題の考察は欠かせないだろう。また、想像力の能動性にも注意を払う必要がある。未来の歴史予測は、われわれが日常においてさまざまなイメージに囚われている状態に気付かせてくれる。言い換えると、想像力としての制度構想力は未来を展望し、切り開いていく偉大な知的なエネルギーだといってよい。政治思想を学ぶことは、未来を決定していく力としての政治についての知識と技術を引き出していくことに他ならないと思う。

最後に堅い表現の多い最終講義を辛抱強く聞いてくださった「近代政治思想史」の受講生や一般の聴衆の皆さんに心より御礼申し上げます。

(1) 北川忠明『レイモン・アロンの政治思想』(青木書店 一九九五) 三七頁参照。

付記 本稿は二〇〇〇年二月二〇日に行なった最終講義をもとに修正・加筆したもので、全体を文章体に改めている。なお注記は講義の体裁をできるだけ生かすため最小限度に留めた。